



TITLE:

歴史的形成としてのナチス的人間像

AUTHOR(S):

中川, 與之助

CITATION:

中川, 與之助. 歴史的形成としてのナチス的人間像. 経済論叢 1943, 56(1): 47-61

ISSUE DATE:

1943-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131975>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

第五十六卷第一號
昭和十八年一月

論叢

聯關財についての覺書

文學博士 高田保馬

北支の物納小作制度

經濟學博士 八木芳之助

新經濟論理の展開

經濟學博士 柴田敬

歴史的形勢としてのナチス人間像

經濟學士 中川與之助

均衡過程と價格統制

經濟學士 中谷實

滿洲中央銀行法の改正

經濟學士 徳永清行

研究

テイツシャアの統計學

經濟學士 有田正三

說苑

明治前期の外資排除に就て

經濟學士 堀江保藏

附錄

彙報

歴史的形成立としてのナチス的人間像

中川與之助

はし がき

吾人は先に舊時代の人間像との對照に於てナチス的人間像の素描を試みた。今その要點をあぐれば、舊時代即ち個人主義時代の人間像は、イ、所謂個人 (Individuum) であり、それは絶對的價値を有し社會を構成する基本單位なりとせられた。個人的人間像はロ、不可侵の天賦の人權を有する。天賦の人權とは自由平等に外ならなかつた。個人的人間像はハ、非宗教的・非歴史的・非傳統的にして理知的・批判的であり、従つて又それは物質的であり現實的であつた。歴史や傳統を拒否する個としての人間は又ニ、世界的・國際的即ち超國家的・超民族的であつた。更に個人主義は人間復興の原理を古代希臘に求めたるが故に、眞・善・美の典型を希臘に求むるに至つた。それ故に個人主義的人間像は希臘型・南歐型であつたといへう。かやうな個人主義的人間像に對して、新しきナチス的人間像はイ、共同體的全體的であつて、人々は所謂「個人」に非ずして肢體 (又は肢節) (Glieder) であり全體の部分である。更にそれはロ、キリスト教を信じ且又ゲルマン民族の神々を信じ、民族の生命と價値を信ずる。それ故にそれは宗教的であり信仰的であり浪漫的であり非合理主義的である。ナチス人間像は種族的・民族的個性をこの上なく尊重する。従つてそれはハ、豊かな民族感情を有し逞しき民族の本能を有するものでなければならぬ。次にそれはニ、實踐的・行動的である。蓋し、彼は熾烈なる民族同胞愛に燃え、共同體的肢體として

の個の價値を知り責任を感じるが故である。彼にとりては民族のことはす刻も坐視傍觀するに忍びないのである。この行動的・實踐的なことが纏て又積極的な勞働（*Arbeit*）への希求となり奉仕となり、歡喜となつてゆく。ナチス的人間像はホ、鬭争的である。それは後に述ぶる如くナチス世界觀に基づき、この世界觀に反する思想を克服せんが爲であるが、自己の個性を行動や業績によりて表現せんとする傳統的な英雄精神の復活でもある。最後にナチスはゲルマン民族主義なるが故に眞善美の標準はゲルマン的・北歐民族的とならざるをえず、從來の希臘的・南歐的なものを次第にすて去りつゝあるのである。

以上の如き新舊人間像の比較は専ら平面的な立場に於てなされたものにしてその歴史的形成の過程に及ばなかつた。平面的なものは更に立體的な構造の説明を俟つて始めて完結されるであらうから以下かゝる視點から再びナチス的人間像を取扱はうと考へる。

一

ナチス的人間像を形成せしめてゐる根本的な要因を歴史的にみれば直接的なものと間接的なものに分ちうる。直接的なものとは時間的にみたる新しき諸條件を指し間接的なものとは舊き傳統的なものを意味する。吾人は先づナチス的人間像を形成せしめたる直接的な要因の説明から始むることとする。

第一、ナチスの世界觀 ナチス的人間像の形成原理となつてゐるものは根本に於てはその世界觀である。世界觀といへば人は主觀的な各人各様のそれを考へ勝ちであるが、ナチス世界觀はナチスの所謂第三國家の建國精神であり新しき獨逸の國體精神である。この世界觀が確立する限りナチス國家は確立するが然らざれば動搖崩壊するの外ないのである。従つてナチスの世界觀は國民の任意勝手に考ふることを許さるゝ主觀的なものに非ずして

政治的・國家的に確定せられたるいは客觀的なものである。それはあらゆる獨逸國民の生々とした理念となり信念となることを國家的に希求し要請せらるゝ。換言すれば之と異なる世界觀・人生觀を有するものはナチス國家内の異端者であり非國民である。従つてナチス國家にとりてはナチス世界觀によりて他の世界觀や思想を克服することが根本的重要さをもつ。ナチス的人間像が極めて鬭争的なのは一には之による。而してナチスの世界觀は吾人の著書にも屢々述べたる如く、ナチスの所謂民族的世界觀 (Völkische Weltanschauung) にして世界史を個人や階級の鬭争史とみずして民族 (Volk) の鬭争史なりと觀るのである。ナチスによれば人類とは民族を基本的生活單位とする集團であり、かゝる民族は生存の爲に不斷の鬭争を續けてゐる。いふまでもなく強きものは生存するが弱きものは亡びてゆくの外ない。かゝる鬭争の原理は地上に於ける生活と生成にとりては免れえざる宿命でありいはゞ自然法則 (Naturgesetz) ともいふべきものである。ゲルマン民族も生きんとすればかゝる峻嚴なる他民族との生の鬭争に勝たなければならぬ。かくしてナチスの世界觀そのものは他民族に對して對立的・鬭争的とならざるをえぬ。ナチス人間像が鬭争的なるは又一つにはこの理による。外に對してかゝる鬭争政策をとるナチスが、内に對しては外の鬭争に對する共同一致の政策を樹立しなければならぬ。ナチスの所謂民族共同體 (Volksgemeinschaft) の理念はこゝから發足してゐる。民族共同體の理念の任務は差し當り今迄階級鬭争の戦線に對峙してゐた勞資兩階級の武裝を解除せしめ、漸次的にゲルマン民族の眞の生活及び福利の共同體を建設することにある。利己主義・階級主義が斷絶せられて共同體主義が強調せられ、鬭争主義が和衷協同主義に變じたのも、さては取得よりも貢獻奉仕が、分配よりも給付・生産が消費よりも生産蓄積が、所有よりも創造が、資本よりも勞働が重要視せられ、殆ど舊時代の生活價值を一變するに至れるも亦この對外政策を基調とする對内政策の表現に外なら

ぬのである。ナチスにとりては純然たる國內政策は存しない。如何に瑣末なる對內政策も對外的鬭爭政策の原理に裏附けられぬものはないのである。ナチスが一見對內的な共同體道德とみゆるものに於ても極めて眞剣味と刺激性とを帯びてゐるのはかゝる對外的效果を目指してゐるによるのである。

さてナチスがかゝる世界觀を以て建國の根本精神となすに至れるは單なる思惟や論理の問題に非ずして、そこには見通すをえぬ歴史的沿用が存するのである。新しきナチス世界觀を生み出すまでの獨逸の國民的・歴史的體驗を理解せずしては、かゝる世界觀が國民大衆の生きた現實の力となつて果敢なる鬭爭を開始してゐる所以を理解し難いであらう。吾人はかゝる獨逸の歴史的事情を明にするために第一次世界大戰後の獨逸の國情を述べねばならぬ。

第二、第一次世界大戰後の獨逸國民の苦惱、ナチス的人間像が形成せらるゝ迄には獨逸に於て社會民主主義時代のあつたことを絶対に忘れてはならぬ。蓋しナチス的人間像はこの社會民主主義時代の人間像の對立者・克服者としてあらはれたものなるが故である。そしてそこに又ナチス的人間像の對立性・反動性・革命性・政治性が潜んでゐるのである。さて獨逸に於ける自由主義は第一次世界戰爭に於ける敗北後、社會主義わけでもマルキシズムを政治の指導原理として採用するによりて大なる變質をとげた。ナチス政權確立迄前後十五六年に亘る社會民主主義政治の時代、ナチスの所謂中間國家(Zwischenstaat)の時代は、自由主義・民主主義とマルキシズムの階級主義・鬭爭主義とが入り亂れて紛糾葛藤を續けた時代である。蓋し、自由主義・民主主義は獨逸資本主義を生育てし其盤なるが、マルキシズムの階級主義・鬭爭主義はこの其盤を分裂破壊せんとするものである。社會民主主義は根本に於て自由主義・民主主義を捨てず、唯それを漸進的に革命する手段としてマルキシズムを採り入

れるものとなしたのであるが、マルキシズムを實現するに民主主義的政治原理を以てせんとしたるは矛盾も甚しきものであつた。社會民主主義政權は自由主義・民主主義の破壊者でありマルキシズムにとりては裏切者なりといはるゝに至つたのはこの理によるのであり、結局その政策は階級的勢力のまにまに、又、實際的必要のまにまに或は左に加擔し或は右に媚びつゝ、絶的存在を續けるの外なくなつたのである。第一次世界大戰後にかくの如き社會民主主義政權の樹立するに至つたのはこれ亦當時の獨逸的事情による。即ち敗戦後の獨逸にスパルタカス團の如き極端なる無政府的革命主義者群を始め、各種の社會革命者の運動が全國的に盛り上り、社會主義への推移なくしては到底その國家的危機を脱しえない情勢となつた。かくて當時の支配階級資本家階級の妥協政策として生まれたものが所謂社會民主主義であり、その理論が國民の興奮と混亂を拾收して遂に社會民主主義政權の時代に入つたのである。マルキシズムを奉ずる社會民主主義時代の生まれと共に、獨逸に於ては勞働階級・無産階級が新興階級乃至未來の支配階級として政治上・社會上・文化上に大なる勢力を占むるに至り、獨逸資本家階級にとりての絶大なる苦惱の時代に入つたのである。即ちこの新興階級たる勞働階級は階級闘争の立場から資本家的陣營に對立する爲に各種の政治上經濟上社會上の權利を要求し又あらゆる福利政策を要求するに至つた。既にこの原則はワイマール憲法にも認められたる所なるも、それが具體的には政黨結成の自由・選舉權の擴張・勞働組合の結成・社會保險の擴大・經營協議會の設立・集團的賃率契約制度の樹立・怠業權の是認・勞働裁判所の設立さては勞働時間の制限短縮・賃率の引上・失業保險制度の成立發展・無料宿泊所の設立・住宅改善等となりてあらはれて、獨逸國家に於ける社會化(Sozialisierung)が行はれ、人々をして獨逸を以て社會政策の母國なりとまで謳はしむるに至つたのである。而してかゝる社會民主主義時代に於ける獨逸人間像は多分にマルクスのもの

ある。マルクス的人間像はマルキシズムの理論に即應して、イ、唯物的・物質的にして非精神的・非宗教的・非歴史的・非傳統的・非浪漫的であり、ロ、階級利己的・階級闘争的にして非全體的・非國家的・非民族的・非和協的であり破壊的にして非建設的である。ハ、超國家的超民族的な國際主義的である。ニ、プロレタリア的にして反資本家的であると共に勞働を嫌厭輕蔑した。蓋しそれは資本家的社會に於ては勞働は搾取なりとのマルキシズムの理論に基づく。ホ、徒らに批判的・理論的にして非意志的・非實踐的であつた。蓋しマルキシズムの唯物論によれば社會の進化は物質的生産力の發展によるに非れば不可能なのであり、個人の意志や努力は全く無力となるからである。ヘ、女性に男性からの解放を要求し男性との平等の權利・地位を希求するに至り、男性の女性化と共に男性の女性化をみるに至つた。かくの如き人間像の支配する時代に獨逸は如何なる状態となつたか、國民の國家と民族とに對する信頼はなくなり社會は階級的に分裂して飽くなき闘争を續けて爲に國民經濟は萎靡衰退し、家庭に男女の協同なくして利己的な便宜的な機構と化し、傳統的宗教や文化は權威を失つて國民の魂は安定を失ひ、人々は徒らに革命と破壊とを叫びて、萎靡した生産機構から漸く搾り出さるゝ生産物を爭奪することに終始するの情勢となつた。かくて所得なき失業者は三百萬・四百萬と漸増して遂にその數が六百萬以上にも上り、漸くにして國民の生活を細々と支へた社會保險も、國民經濟の衰退につれてその經濟的經營が行詰るに至つた。これ將に獨逸民族死滅の淵に臨んだものである。かゝる民族の大危機に民族的生の最後の反撥として現はれしものこそナチス運動なのである。ナチス運動は生易しい理論や思想の問題に非ずして死か生かを増した國民的大苦闘史であつたことは之を以て理解しうるであらう。従つてナチス的人間像は社會民主主義時代の人間像と全く異なるのみならず、その克服者として現はれたものなることも亦了解しうるであらう。ナチスの理論は抽象

的な思惟の所産に非ずして具體的な實際から生まれたものである。即ち第一次世界戦争の際に、戦場に於ては打ち越え難き民族的文化の相異や利害の對立、民族的感情の齟齬憎惡をまざまざと體驗し、又、銃後に於ける他民族たる猶太人の所業——戦争を好餌として前線に血を流せる獨逸民族を後目に恬然と私腹を肥やし社會的勢力を張ることに狂奔せる——をみて、ナチスは眞に生の運命を共にしうるものは結局に於て血を同じうする民族同胞 (Volksgenossen) の外にはない、民族こそ人類生活の最も元的な基本單位なのであると確信するに至つた。而してかゝる民族への自覺はナチスの史觀にまで發展して、世界史は今日迄色々に說かれて來たが要するに民族間の鬭争に過ぎなかつたのである。種々の思想も理論も民族的・意圖・感情に裏附けられぬものはない。それを單に抽象的な理念・思想として受けとつた所に獨逸の犯した大なる誤謬があつた。されば獨逸國內に侵入し蟠つてゐる他民族の思想を一掃することこそ獨逸民族復興の前提であらねばならぬ。ナチスはかくして先づアングロサクソン民族の思想として自由主義・個人主義・民主主義を、猶太民族の思想として唯物主義・階級主義・マルキシズムを國外に追放するの大運動を開始したのである。ナチスが個人主義やマルキシズムを憎惡・排斥するとは正に民族的本能の爆發ともいふべきものがある。それは思想を思想として批判吟味するといふやうな境地を乗り越えてゐる。蓋し、ナチスに於ては個人主義やマルキシズムはアングロサクソン民族や猶太民族の民族的謀略にすぎないのであるから。ナチス的人間像が如何に非個人主義的・非マルキシズム的であり、又如何に民族的・同胞的・共同的であるかは、かゝる民族的意識・本能感情の奔流としてのみ理解されるのであり、又、かの血の原理も土の原理も食と住宅の原理もアウタリキーの原理も、さては奉仕の原理や勤勞の原理も、更には英雄の理念も指導者原則も民族的生命の復興への情熱と信念の表現ならぬはないのである。思ふに獨逸自由主義の發展な

かりせば第一次世界戦争はなかりしなるべく、第一次世界戦争に於ける獨逸の敗北なかりせば獨逸に社會民主主義時代はなかりしなるべく、社會民主主義時代なかりせばナチス革命は勿論起りえなかつたのである。同じく英米の自由主義個人主義を克服するといひ乍ら、その態度や熱意や方法に於て日本と獨逸との間にかんりの相異をみうるのには一には傳統的國體精神にもよるが他にはかゝる歴史的基礎體驗を異にするからである。吾人は以上にナチス的人間像の歴史的形成原因として最も近いものを説述した。次に更に遡りてかゝる人間像を形成した獨逸傳統文化に及ばねばならぬ。

二

ナチス革命は舊時代の文化を根本的に變革すると呼號し、新しき時代を形成し擔當する新しき人間像は舊時代のものとは全く對蹠的なものとしてあらはれてゐるが、併し、吾人の既に述べし如く、ナチス文化は社會民主主義的文化やそれに先立つ獨逸自由主義文化を、外にしては理解しえざる如く、それらの各時代を貫流する獨逸的なもの、傳統的なもの、獨逸的本質的なものを外にしては理解しえないのである。換言すれば、嶄新にして革命的にみゆるナチス文化もかゝる獨逸的本質の現代的表現にすぎないのである。ローゼンベルクも「歴史と云ふものは一の無から一の或物に發展したのではなく、また些細なるものが偉大なるものに展開したのでもなく、或る一つの本質が全然別種のものに變化したのでもなくて英雄や神々や詩人達に依つて遂行される最初の人種の民族的覺醒は既に永遠に一つの頂點を示すのであるからである。かうした最初の雄大な神話的な最高業績は主要の部分に於ては最早「完全にせられる」のではなくて單に別の形式を採るだけである。或る神若くは英雄に吹込まれた價值は善にも惡にも永遠なものである」といふ²⁾。かくして吾人はナチス文化の基調をなす民族主義・全體主義に

も、非一般的な個性主義にもさては浪漫主義・神祕主義にも、又、貴族主義・英雄主義・指導者主義にも、軍人主義と農民主義にも、創造主義・勞働主義にも反猶太主義にも各舊き傳統的淵源をみ出しうるのである。以下聊かこれが説述を試みるであらう。

イ、民族主義はいふまでもなく民族的個性の尊重の上に立つ。抑もこの個性主義は強き獨逸的傳統をもつものである。それは獨逸人自ら認めるのみならず他國民も亦夙に認むる所である。ゾンバルトは獨逸人の個性的要求の強きことそれが屢々つまらぬ對立を惹起することを指摘し、デュルハイムは「個性の特殊性を失はぬことが獨逸哲學及び宗教の歴史を一貫してゐる」¹⁾。「個性的なものに對する愛好は對人關係に限らず他のすべての生活を一貫した要素となつてゐる」²⁾といふ。而して氏は更に個性尊重には種々な理由があるが、獨逸人にとつては個性は何よりも先づあらゆる生きた形態に特殊な意味を與へる獨特無比な特性に具はるゝ根源的な價值でありそれこそゲルマン的地方的な魂の神祕である。獨逸的な個性の體驗が宗教的な基礎の上に立ち宗教的な擴がりをもつものなることを指摘してゐる³⁾。而して獨逸的な個性と密接に結びついたものは獨創性創造性又行動性といふことであるこれらは更に次の深祕主義・浪漫主義と結びつく。ロ、獨逸神祕主義・浪漫主義、獨逸神祕主義・浪漫主義は近世に於ては合理主義に反對する非合理主義運動として歴史上に顯著に現はたのは蓋し、一七七〇年代の所謂シュツルム・ウンスト・ドランクの時代であるが、併しその淵源は極めて舊く^註、殊に十三世紀にあらはれし獨逸神祕主義の巨星マイスター・エックハルト以來その光芒は歴史から消ゆることなく、近代思想界の大立物、例之、ルツターを始めヘルデル・カント・ヘーゲル・フイヒテ・デュラー・ベートヴキン・ゲーテ・ショパンハワー等々何れもそれをうけ繼がぬものはないのである。洵に「浪漫主義は獨逸の精神史上の過渡的な一時期ではなく、獨逸

3) ゾンバルト著獨逸社會主義、藤波田譯 p. 171—175

4) デュルクハイム著、獨逸精神 p. 91 5) 同上 p. 94

6) デュルクハイム著、前掲書 p. 52—53

的な生活、否恐らくは凡そ生活そのものに於て絶えず繰返される運動なのである。その浪漫主義こそ凡そ人間の念頭を離れることのない或る一つの根本問題に對して、少くとも一つの偉大な解答を與へて來たのであり、現在に於ても與へつゝあるが故である。従つて浪漫主義は決して過去のものとなり終ることはない⁷⁾のであり、ナチスの國家觀・經濟觀文化觀にはドイツ浪漫派との深き關係がみうるのであり、殊に「民族文學」と呼ばれるものは血と土から生れた「神祕」にみちみちてゐる。

(註一) 「オーデイン―多くの神々の最高神たるオーデインは死滅した。然し北方的人間の精神的根原力の永遠の反映像としてのオーデインは今日でもなほ五千年前と同じく生きてゐる。彼は自己の中にあらゆるもの、即ち名譽と英雄精神、歌謠即ち藝術の創造、權利の擁護また永遠の睿智探求等々を包攝してゐる。これと同じ精神が騎士道並びに偉大なる北方的西洋的神秘主義者達にも現はれてゐるがマイスター・エツクハルトは實にその最も偉大なるものであつた」。

ハ、英雄主義・貴族主義 獨逸に於ける英雄主義・貴族主義は上述の個人主義や神祕主義・浪漫主義と密接に結ばれてゐることはいふまでもない⁸⁾。而してそれも亦永き傳統をもつものである。ローゼンベルクは「名譽の觀念が何處かに於て全き生活の中心であつたとすればそれは外でもない。北方的ゲルマン的の西洋に於てである」⁹⁾といひ、數千年の長きに亘るゲルマン民族の闘争も英雄的な名譽觀念を中心として行はれたのだといつてゐる。北方のヴァーキング^(海士)に於て、ゲルマンの騎士に於て、プロイセンの士官に於て、バルト海のハンザ同盟に於て、將又、獨逸の兵士と農民に於て、その生活を形成する根本理念は名譽であつた。「英雄的氣分は凡ゆる北方的な民族の根本典型である」¹⁰⁾となし、新しき國民社會主義の世界觀は英雄的の世界觀である……獨逸民族の英雄的世界觀はナチスの英雄的闘争によりて一つの復活を體驗するのであるから¹¹⁾といつてゐる。

(註二) デュルクハイムは「力とその試練の體驗を求める衝動、或は抵抗を克服するために狐疑逡巡する所なく、猷身的な努

7) デュルクハイム、山田三郎編 獨逸精神の造形的表現, p. 117—8
8) ローゼンベルグ著, 前掲書 p. 534—5
9) ローゼンベルグ著, 前掲書 p. 114
10) ローゼンベルグ著, 前掲書 p. 103
11) 同上 p. 90

力を捧げる態度は獨逸的な本質に合致したものである。何等躊躇する所なく目標に向つて前進し、凱旋將軍さながらに己れにむかふ一切のものを無造作に踏みこみじつて、徒らに思慮を用ふることなく胸中に躍動する理念のままに既存のものを打倒し、熱意と嘲笑と鐵石の意志を以て新たなものを實現しようとするこの態度こそ、獨逸的であるゲルマンの英雄に體現されたこの力は、獨逸的な沈澁の衝動から生ずる危険を阻止すること出来る。右顧左眈することなく胸中の理念を實現する人格的な献身の絕對性は獨逸的な個性尊重の一つの根據となつてゐる¹²⁾。同氏は又獨逸の英雄精神が優しき詩・音樂の精神と一つをなしてゐることを説き、獨逸人の詩的・藝術的な精神と劍の精神とは引離せることが出来ぬ「精神の要諦として相結ばれて高度の統一をなす七絃琴と劍とは獨逸的性格の二つの傾向を具象するものである」¹³⁾。「獨逸の歴史に於て騎士と吟遊詩人、文人墨客と武人とが切つても切れぬ繋がりをもち」となして、不滅の英雄オーデン・獨逸騎士ヴァルテル・フォン・デル・ノールゲルワイデ・十二世紀の騎士ヴォルフラム・フォン・エシユンバツハ・ウルリツヒ・フォン・フツテン、更にはフリードリツヒ大王及びその甥、アイヒエンドルフ・ゲナイゼナウ及びヒトラーを例擧してゐる¹⁴⁾。

ナチス國家に於ける指導者の理論は勿論封建時代の如き權力主義や自由主義時代に於ける財力主義を止揚したるものであり、それに於ては民族的共同體的人格價值が根本となつてゐるのであるが、しかもその指導者の權威と地位を語り名譽と矜持を説きその自由を認むる所更には國民が指導者たらんと憧憬する所、ゲルマン的英雄主義・貴族主義の現代的表現たることを何人も否定しえないであらう。

(註三) デュルクハイムは「指導者こそ國家主義的な意味に於ける權威と自由との最も明瞭な生きた姿である。……眞の指導者は必ずや同時に自己の指導下に立つ全體の最も沒我的な下僕なのだ。他方指導者は權威の所持者である。……獨裁者の暴力に基づく外部的な權威とは異り指導者の有する權威は苟くも眞の全體がその成員に對してもつ内面的な權威である」といふ¹⁵⁾。ローゼンベルクは「一つの信仰、一つの神話はそれが全人を捕へた時にのみ純粹である。勿論政治的指導者はその團體の周邊にある被指導者を一々吟味することは出来ないであらう。然し教團の中心に於ては一路邁進の態度が實施されねばならぬ。……フリードリツヒ大王の名譽概念、モルトケの訓練方法更にビスマルクの神聖なる意志この三つの力が種々なる人物に種々混合して具象化されて悉く唯一つの事に奉仕するのである。獨逸國民の名譽に奉仕するのである。此の名譽こそ未來の獨逸人の類型を規定すべき神話

12) デュルクハイム著、生活と文化、橋本譯 p. 51-2
13) 同氏著、獨逸精神、橋本譯 p. 117
14) 同氏著、獨逸精神、橋本譯 p. 119
15) 同氏著、獨逸精神、橋本譯 p. 65-66

である」¹⁶⁾と。ホツペは獨逸史中に於ける指導者人格として、古代獨逸の英雄ヘルマン及びヴィドキン、十世紀に於けるハインリヒ一世を、更に二世紀降つてはロタール皇帝及びハインリツヒ獅子皇帝を、次で第十五世紀のルーテル、降つては大選舉公とフツードリツヒ大王、近世のビスマルクをあげてゐる。そして彼は指導者の人格の歴史の進行に對してもつ決定的な力を述べて「大衆はつねに素材であり指導者たる個人がそれに形式を附與するのだ」。「指導者のなすべきことは大衆のところへ降りて行くことではなく、最初はいく少數の者しか知らないところの純粹な軌道に、彼等大衆の意思を導いて行く」のであるといつてゐる。¹⁷⁾

二、軍人主義と農民主義 獨逸民族は又古來軍人の民族であり農民の民族である。而して軍人的であることは上述せる英雄主義・貴族主義と密接の關聯をもつてゐることはいふまでもない。

思ふにゲルマン民族は北方の然も礪礪の地に國をなしたのであるが、それより茲に數千年その發展の歴史を顧みれば、その根本的力は惠まれざる自然と不屈不撓の闘争を續けし農民魂と、四周の他民族との生の闘争に勇猛果敢なりし軍人魂とにあつたといはねばならぬ。ナチスが農民魂とプロシヤ的軍人魂こそ獨逸を形成する根本精神なりといつてゐるのも之による。洵に獨逸農民の勤勉・努力・質素・素朴・忠實・教度及び愛郷心と獨逸軍人の嚴正なる規律服従及び高き責任力とは力強き獨逸精神の基底をなしてゐるのである。デュルクハイムは獨逸人に於ける殊に農民の自然との緊密一體的なことをあげて、「自然に近い、自然のまゝの生活が即ち純粹な生活であるとの感情は典型的な獨逸的感情である」¹⁸⁾。而して「獨逸に於ても最も多く大地に結ばれた人間はいふまでもなく農夫である。農夫は大地と一體となり四季星霜の生命がやがて彼自身なのである。何代も前から大都會の雰圍氣に浸りきつてしまつた極めて少數の者を除けば獨逸人の胸の奥には依然として農夫の生命が脈うつてゐる」といふ。氏は又、「我々は兵士の民族たることにも變りはない」²⁰⁾、「獨逸民族が全體として軍人的素質をもつてゐることを知らねばならぬ」²¹⁾となし更に氏は有史以前から獨逸的な英雄的事業と軍人精神との痕跡が見られる。機

16) ローゼンベルグ著 前掲二十世紀の神話 p. 414-415
 17) 日獨文化協會譯 國民社會主義の基本問題 p. 177-211
 18) デュルクハイム著 獨逸精神 p. 35
 19) 同上 p. 40
 20) デュルクハイム著 前掲民族性と世界觀 p. 19

牲的精神と勇氣との不滅の證左たる事業が相次いで爲し遂げられた。この二つの逞しい力が結びついて政治的秩序建設の力となつた。「現代獨逸の政治的業績も要するに皆ては文化の領域にのみ創造力を逞しうした獨逸民族の内面の力が、今や軍人精神の力と一體となり、かくして現實を支配し秩序を建設する事業の力となつたことに因るものである」といつてゐる。私は茲でまたかの權力哲學を説いたニーチエが「獨逸文化の將來はプロシヤ將校の息子の雙肩にかかつてゐる」、「余の出發點はプロシヤの兵士である」といつたことを思ひ出さざるを得ぬ。ホ、反猶太主義、ナチスが彼等の固持する民族主義の立場から、且又獨逸國內に巢喰ふ破壊者・攪亂者としての憎惡から猛烈なる猶太人排斥運動を續けて來たことは何人も知る所であらう。ナチス政權後猶太民族を排斥する爲に發布せられたる法令をみるに

い、專任官吏制の復活に關する法律（一九三三年四月七日）同法第三條に「非アーリア人たる官吏は退職せしむ」とある。ろ、高等専門學校に關する法律（一九三三年四月二十五日）「各種高等専門學校に於て在學生の總數に對し、非アーリア人學生は獨逸の總人口に對し非アーリア人の占むる率を超ゆるをえず」は、歸化權取消及び國籍剝奪法（一九三三年七月十四日）「一九一八年十一月九日即ち革命勃發の日よりナチの政權を得たる一九三三年一月三十日までの間に行はれたる歸化權は其の望ましからずと認める場合には取消すをう、に、獨逸公民法」その第二條に「獨逸公民は獨逸種又は之と類種の血統を有する國民にして」云々同條に「獨逸公民のみが法律の規定による完全なる權利の所有者なり」、ほ、獨逸人の血統と名譽とを保護する法律（一九三五年九月十五日）「第一條猶太人と獨逸種又は其の類種の血統に屬する獨逸國民との結婚を禁止す、第二條猶太人と獨逸種又は其の類種の血統に屬する獨逸國民との結婚外の交渉を禁止す。第三條猶太人は獨逸種又は其の類種の血統に屬する四十五歳未満の女子獨逸國民を家政上の目的にて使傭するをえず。

等極めて峻嚴苛烈なるものである。抑も反猶思想は歐洲に於ては既に基督紀元以前からみられるのであるが、それは基督紀元後には宗教上・人種上・科學上から更に發展してゐる。獨逸に於ける反猶運動もナチス運動に始つた

21) デュルクハイム著、前掲、獨逸精神 p. 124

22) ヘルトル、ニーチエと民族社會主義 p. 71

23) 同上 p. 73

24) 菅原蕨著、獨逸に於ける猶太人問題の研究 p. 993—404

わけでなく、十九世紀までは宗教的立場からそれが起り、十九世紀以後、猶太人が完全なる市民権を獲得するや、財界・政界・言論界その他各方面に無制限に進出するに至りて種々の重大なる問題を惹起しその反動が反猶運動となつてあらはれたのである。²⁶⁾ ナチス運動が反猶運動より更に進みて猶太人放逐運動にまでに變化してゐるのであるが、その反猶思想は寧ろ獨逸的傳統ともいへるのである。

以上吾人はナチス的人間像を形成してゐる歴史的・傳統的思想を述べた。それは主要なる點を中心としたのであつて他にも述ぶべき多くのものが残されてゐるが、今は紙數の都合上それに及びえない。要するに、ナチス的人間像は忽然としてあらはれしものに非ずして獨逸の歴史の形成したものである。唯、第一次世界戦争に敗れし以來の塗炭の苦難と第一次世界戦争以來各國に起れる思想や制度の諸變化、わけでも露西亞革命や日本・伊太利の勃興といふ國の内外に於ける國民的體驗が舊き傳統精神を復活させる大なる動機となつてゐることを見遁してはならぬであらう。従つてそこには日本的なもの・伊太利的なもの・露西亞的なものも尠からず亦見出しるのである。

むすび

吾人はナチス的人間像を形成するに至つた歴史的傳統を究明した。今之を要約すれば、ナチス的人間像の直接の形成原理はナチス帝國の建國精神たる民族世界觀なるが、かゝる世界觀を確立せしむるに至つたものは第一次世界戦争に於ける國民的體驗である。即ち戰場に於て體驗せられし克服し難き民族的反感・憎惡、鉢後に於て體驗せられし猶太人の非國家的所業に對する悲憤慷慨が、ナチスをして民族の生きる道は民族同胞によるの外なし

との確信を抱かしむるに至つたのである。而してマルキシズムを奉ずる社會民主主義時代の國情は益々この確信を高めしめるに役立つた。この民族的人生觀がかれらの世界觀となり哲學となり政治となり文化となるに至つたのであるが、それが血と飢餓とを以て體驗せられたる所に甚しく強固なるものとなつてゐる。併し仔細に検討すればナチス新文化は決して傳統文化を無視して生れたものに非ずして寧ろその復活なのである。指導者主義も信仰主義も軍人主義も農民主義も勞働主義も反猶主義も悉く永き獨逸的傳統をもつてゐるのである。即ちナチス的人間像の形成因は最近時的な國民的體驗であるが、その素材因は舊き文化の中に求めなければならぬ。而して吾人はナチス文化を通して知ることは、單にその文化の素材が舊き傳統をもつのみならず、又新文化を建設せんとする態様にも亦傳統的なるものを否定しえざることである。即ち他民族的なものは非獨逸的なものとして、獨逸的なものの對立物として措定せられ、それ故にその克服の方法が鬭争によらんとすることである。思ふにそれは民族鬭争が激しく革命につぐ革命を以てする歐洲に於ける文化的宿命ともいひうるのであるが、今度のナチスに於ても特にそれが顯著に現はれてゐる。ナチスに於ける鬭争の理論と組織は精緻を極めたものである。民族鬭争主義の立場から歴史的傳統的文化を動員しつゝある獨逸が、新しき歐洲の諸國家と彼等の言ふ如く獨裁主義にあらず民主主義に非る眞の共同體主義の指導者國家を建設せんとするとき、如何なる傳統に呼びかけ如何なる理論によらんとするか、歐洲の新秩序をみ守る吾人にとりての大なる興味たらざるをえぬ。それと關聯してナチスが八紘爲宇の大理想を抱く日本の皇道を大いに學ばんと努力しつゝある態度は更に注目すべき所である。かゝる方向への研究は吾人の先に發表せるものに之を譲る。²⁷⁾(二七・二・五)